

おおぞらのきにむねはって

先週より赤っぽくなってきた落ち葉を軽く踏みながら、あたしは早足で山道を登ってた。

風もすこし冷たくなってるけど、まだもこもこしたくなるほどじゃない。あたしは長そでのシャツとパンツにスニーカー履いて、落ち葉のクツションをちよつと跳ねながら歩いてく。

大会が終わって、部活動も一段落したし、意識して動かないと動けなくなっちゃうからね。手に持ってる、うちの——パンパカパンのパンが冷めないうちに、上まで登りたいし。

まあ、今日はそれだけが理由じゃないんだけどさ
 おおぞらの樹に向かって歩いてると、ほわっ、と空いた広場に出るんだ。

まえはちっちゃなほこらがあるだけだった場所。でも今は、2階建ての簡単な建物が建ってる。

樹が何本かからんで、まるで樹で編んだみたいだね　実際、そうやって作ったのかもしれないけどさ。
 あたしは、おみやげのパンの袋を抱えながら、その建物に向かっていった。

シャツ、シャツ

あ、いたいた。

ほこらの近くに、赤と白の姿がふたつ——巫女さんの服で掃除をしている、満みちると薫かある。

頭に落ち葉が2枚乗っかっているのが、まるでアクセサリみたいだな。

「ふたりとも、似合つよねえ」

素性がバレないように、舞まいとあたしで巫女さんに仕立てただけで、こうして見てもぜんぜん違和感ない。ふたりとも、もうすっかりこの人になっちゃった。

3 おおぞらのきにむねはって

他の世界から来たなんて言っても、もうだれも信じないかもね。

シャツ、シャツ

11月も半ばを過ぎて、おおぞらの樹も周りの木々もずいぶん葉が落ちたわ。

その分、掃き掃除のしがいがあるというもの。

シャツ、シャツ

赤と白のこの着物にも、ずいぶん慣れた。

巫女という、神様に仕える人たちの服だそうだから、精霊たちのお世話になっている私達には相応しい服だと思つ。

「ふたりとも、似合うよねえ」

「ああ、咲さき、いらつしやい」

満が咲に挨拶しているのを、私は横目で見ながら

掃除を続けた。休日この時間は、家で手伝いをしているはずだけど

「巫女さん服の上に、色ちがいのエプロンなんだ」
咲が私の方に近づいてきてそう言う。私は満に目で問いかけたけれど、首をかしげるだけ。

やけににこにこしてる咲を見ると、少し不安になる。まわりから巫女だと思われてしばらく経つけれど、実は満も私も、何も知らないのだから。

「そう いけなかった？」

「いいのいいの。それがここのスタイルだよ。あ、とりあえずこれパン、差し入れ」

満が受け取ったパンの袋の中から、わたしはひとつだけ取り出して、ほこらに供えた。

「うぐいすが好きなんだったよね」

「ええ、あんこ入りが。嫌いなのはカレー」

咲の声に、ほこらから戻ってきた私は淡々と答える。誰のことが、言わなくてもわかるのは気が楽でいいわ。

「それだけは、あたしと意見あわないんだよねえ、
フィーリア王女はさ」

とどきぎ来て、お供えを食べてるらしいことは知っている。姿は見せてくれないけれど、この服を着ているとなんか近くに居る気がする。でも、

「それで？」

「目的はこれだけじゃないでしょう？」

満の声が、私と重なった。咲がひとりでここに来ることなんて、滅多にないことだから。

「満と薫に、ちよつと相談があるんだけど。舞ぬきで」

だから、私は頭をかいてる咲の横から、満に目で言つたわ。またいつものが始まつたみたいよ、と。

「たんじょうび？」

び、びっくりしたあ。

あたしが言つた言葉を、満と薫がふたりで同時にくり返してきたんだもん。

「そう。舞の誕生日、だけど」

聞こえにくかったのかな、って思つてゆっくり言い直してみたけど、

「たん、じょうび」

満は目を空に向けて考え込んでるし、

「たん、じょう、び？」

薫は薫で、言葉ばらばらにして意味考えてるし。あれ？

「そ　う、だよ？　知らなかつたっけ？」

正面からあたしの顔見ながら、しつかりうなずくふたりを見て、あたしは気がついた。

そっか。そういえばあたしの誕生日、今年は部活が忙しすぎてやれなかつたんだっけ。去年はダークフオールであんなことになつてたから、ここでの誕生日って初めてなんだ。

「舞がね、生まれた日のこと。お祝いするんだよ」

5 おおぞらのきにむねはって

「ああ」

あれ、なんだろう？ ふたりして顔見合わせて、うなずいてるけど、

「気づかなかったわ」

「そんなものがあるのね」

なんか、へんな雰囲気？ でも意味は理解したんだよね。ならまあいっつか。

「満と薫のときだって、もちろんちゃんとやるよ。あとで教えといて。」

でね、誕生日にはプレゼントを贈るんだけどさ、3人で一緒に贈りたいなって思ってたさ。どうかかな？」

あたしのパーティやらなかったんだから、自分もやらない、なんて言い出すんだもんねえ、舞。でも、

3人がかりなら受け取るでしょ。

「私には、咲ひとりで贈った方が」

「薫、待って。それで、何を贈ればいいの？」

？ いま薫がなにか言いかけた気がしたんだけど
いや、それより。

「それ相談しに来たんだよ。3人で贈るんだから、あたしだけ考えちゃダメでしょ。」

それにさ、あたしが考えると、つい自分が欲しいものとかしたいことになっちゃうんだ。舞はそれでもいいって言うってくれるんだけど」

「ふ〜〜ん」

ん？ えっ!？」

「な、なによ、ふたりして!」

目の前に、ふたりの顔がドアップになってる。しかもふたつとも、にやにやした顔つきで。もう！

「それより！ なにがいい？ 舞はなにが欲しいと思う？」

「欲しいもの。ものじゃなくてもいいかしら？ たとえば、願いをかなえるとか」

あたしから少し離れて、満が訊いてきた。願い、ねえ。

「できるんだったら、それがいいと思うけど。なんか知ってるの？」

ふたりで顔見合わせて、すっかりうなずき合っている。これは、当たりかな？

「ええ。ここ何日か、舞がああほこらの前に来ていてね」

「後で私たちのごとくに寄ってはくれるんだけど。」

ほこらの前で、しばらくじっとしてるのよ」

ふたりがまた、顔を見合わせて、

「むね かな？」

「むね ね」

一瞬、あたしは言われた言葉がよくわからなかった。

「むね って、胸??」

あたしが自分の胸を右手でおさえて言ったら、ふたりで思いつきりうなずいて、

「ええ。来るたび、おおぞらの樹に向かって、胸をぐいっと突き出してるから」

「その動作は、たしか胸を強調する動作よね。舞が言っていたわ」

そ、そうだったんだ。舞がねえ そんなそぶり、

あたしの前じゃ見せたことなかったのに。

まあ、あたしも似たようなもんだし。気にするそ
きが来たってことなのかな なんか、ちよつと寂
しい感じ。

でも、胸か。それなら

「満、ムーブをお願いして、いい？」

「む？？」

満の返事の代わりに、その影から小さな精霊が出
てきたよ。

ふしぎな声の、小さな精霊、ムーブ。

この子とムーブは、結局ずっとみどりの里——こ
こに残ることにしたんだよね。満や薫といっしょに。
でも、普段はふたりの影に隠れてる ひとだまと

勘違いされちゃうからね、巫女さんの近くにいと。
近づいてきた精霊を、あたしは両手で軽くつかま

えて、顔の目の前に持ってきた。

「ムーブ、たしか前に、舞をちよつとやくしたことがあっ
たよね？」

7 おおぞらのきにむねはって

「ふぶー」

小さな精霊が、くるんと一回転してうなずいた。そうそう。あのときは人がいっぱいいたから、騒ぎになるんじゃないかと思つてヒヤヒヤだったんだよね。でも、ここだったら

「それさ、部分的にっつても、できる？」

「薫さん、来たわよっ」

おおぞらの樹のすぐ近くにある社務所にむかつて、わたしは声をかけた。

ついさつき、わたしに電話かけてきた薫さんの声、ちよつと上ずつてたものね。わたしに贈りたいものがあるから来て欲しい、って。普通なら喜ぶところだけど きつと、咲が頼んだんだわ、これ。

念のためにパンパカパンを覗いてきたけど、いなかっただもの。

パーティー断っちゃったのはわたしだけだ プレゼ

ントくらいちゃんともらつのに。心配性よね、咲って。

「出てこないよ、帰っちゃわよっ」

社務所から、巫女姿の薫さんが出てきたとき、手に何も持っていないのを見て、わたしは確信したわ。きつと、咲がなにかたくらんでる、って。

でも

わたしはちらつと自分の身体を見た。ちよつと厚手だけど、トレーナーにジーンズ。そろそろセーターの季節だけど、念のために、いつでも脱げるカーディガンにしておいたのよね。咲だったら、いきなりおおぞらの樹に登ることになるかもしれないんだもの。なに出でてきてもいいように うん、これなら大丈夫。どんなプレゼントでも、なんとかなるわ♡

なんて、考えてたのよね。そのときは。

だって、まさかそれ以上だなんて、思つてなかつたんだもの

「薫さん？ 来たけど え!!?」

舞が薫の近くまで歩いて行くのを確かめて、あたしは木の影から飛び出して、舞の両腕をばばっ、と持った。

「まーいちゃん♡ ちょあつと、そのままできてくれる?」

「え、なに? ちょつと、なに!!?」

あたしは舞の腕いっぽん、薫にまかせて。よし

「よあつし。満、ムーブ、今だよ!!」

「む〜っ!!」

いつもより大きなムーブの声と一緒に、なにかがうずを巻いて飛んできた。舞の、胸のあたりに。

「ハッピーバースデー、舞! これが、あたしたち

からの贈り え?」

「む〜っ!!」

あ、あれ?

「む〜っ!!!!」

ちよ、ちょつとちょつとちょつとあつ!!?

「ムーブ、ストローツ!!」

両手でバツテン作って大声出して、それでやっとムーブのうずが止まった。ふう。

「なに?」

その後ろから満。なに言ってるのさ!

「なに、じゃないよもう!! なによ、これ!」

「悪いの?」

「大きい方がいいって言った。咲」

「限度ってもんがあんでしょうが。見なさいよ、これ。バレーボールか風船かって感じじゃないの!

もうちよつと、こつ 舞の身体に合つように、ふわあつと って、なに言わせんのよっつ!!」

ぼん、ぼん。

え?

肩に、手の感じが二回。薫も満も、目の前にいるのに

恐る恐る振り返つたら、

「咲の、バカあつっつ!!!」

思いつき張り飛ばされたあたしは、舞の背中が小さくなるの、じつと見てた。

「大丈夫、咲?」

満と薫が両手を取って起こしてくれるまで、地面に倒れてたことも、気づいてなかった。

うっ、歩きにくいなあ

一歩進めるたびにあつちこつち揺れて、そのたびに体が傾いちゃうし。シャツに擦れて痛いし。はじけたブラは背中でもたついてるし。

でも、それよりなにより、とにかくっ!

「重いっっ!!」

「うわっ!? ああ、美翔さん。どーしたの、それ」

思わず叫んじゃったわたしの前に、安藤さんがい

た。マズいところで会っちゃったわ

「あ、安藤さんこそ、なんでここに?」

「うん、本の読み聞かせ会にね、落ち葉が欲しかったから 大丈夫?」

ああ、やっぱり重いのが顔に出ちゃってるのね。ええと

「ボールでも入れているの?」

「え? あ、う、うん」

胸を下から持ち上げたら、本当にボールみたい。やわらかすぎる、ボール。

「はあ そんなに悩んでるとは思えなかったけど。美翔さんはもともとやせ形なんだから、いつもの胸でちょうどいいと思うわ」

「え、あ、うん。そう そうよね」

そう。この胸が似合っていないことくらい、わたしが一番よく知ってるもの

「あ、ひよっとして、後悔してる?」

「後悔といういか ちよっと。ちよっと、ね」

カツン、と石の音がした。思わず蹴っちゃったんだ、わたし。

下を向いても足元が見えない。なんだかもつ、絶望的

「日向さんが、笑って済ませられないイタズラするとは思えないわ。少なくとも、あなたに対しては、ね」
そう思ってたわたしの耳に、とっても優しい声が聞こえてきた。

クラスメイトの安藤さんじゃなくて、子供たちに本を読んでもときの、声？

「日向さんが謝ってきたら、ちゃんと仲直りするのよ。じゃ」

わたしにそう言いながら歩いてく安藤さんを見送りながら、わたしは考えた。

以前、ムーブのちからで身体ぜんぶがちっちゃくなつたときだって、しばらくしたら元に戻ったんだっけ。すぐ元に戻る。だからちよつとだけ、大きな胸を味あわせたかったのかな。

「だからって、すぐには許せないけど」

大きななら咲だって同じくらいだし、それで悩んでるとこなんか見せたことないもの。勝手に思い込んで、勝手にひとの身体いじって、もつ、もつ、もう、もうもつもつもつもつ！

大きく振った足が、なにかを思い切り蹴飛ばした。そのとたん、

「あれてますね、舞さん」

ぼつ、と、明かりがついたみたいなきさな声。

わたしが頭をあげたら、そこに小さな女の子が浮かんでた

フイ！

「フィーリア女王!? どうしてここに まさか、また何か悪いことが!？」

11 おおぞらのきにむねはって

わたしが女の子のそばによつたら、小さな顔が大きく横に振られて、

「おっきいですね、おむね♡」

「は、はい？」

いきなりそう言われたから、変な答えになっちゃった。でも、

「よく見てましたよ、おおぞらの樹から。あなたが
おむねをはってるところ」

落ちていた声でそう言われたとたん、なんだか恥ずかしくなったわ。

いつも、ずっと見てたなんて あ、いけない。

「違います！別にそんな、胸を張ってたわけじゃなくって」

誤解を解こうと思って思わず近づいたわたしの顔の前に、ちっちゃな手が、まっすぐ出てきた。

「わかっていきます。でも、まわりから見たらどう見えますか？」

え？ あっ！

「それじゃまさか、咲も、満さんたちも」

ちっちゃな顔が、わたしの前で大きくうなずいた。

そう。満さんと薫さんも、おおぞらの樹の前のわたしを見てただ

「話して、みますか？」

「は、はいっ！」

「ムーブのちからは吸い取ってあげましたから、もうしばらくすれば元にもどります。

さあ、いつてらっしゃい♡」

舞が降りてった山の道を、あたしはしばらく、ぼーっと見続けてた。

叩かれたはずなんだけど、ほっぺたは全然痛くない。どっちかっていうと、胸の奥の方が痛いな

胸、か。

「満と薫は、気にしないの、胸？」

社務所の前の長いすで休んでるあたしがそう言ったら、両脇で立ってたふたりから同時に答えが帰ってきた。

「別に」

「意味がないし」

意味がない？

なんか、引つかかるな。頭を上げたあたしの上から、のぞき込んでる顔が、

「胸は子供が栄養を吸うためのもので」

「わたしたちに、子供は関係ないもの」

そう言われてはつとしたよ。そっか、だからさっき、妙な顔になつたんだ。

誕生日とか、生まれるとか、それ全部が関係ない。

あたしや舞と、違うから

「そんなこと、ないっ！」

思わず出てきた声が、思ったより大きかった。

「そんなこと言わないでよ。そんな悲しいこと、普通の声で言わないで！」

きつとできる。ふたりにだって、きつと子供は作れるからっ！」

「どうやって」

え？

「ど・う・や・つ・て？」

腰をかがめたふたりの顔が、あたしのすぐ近くまで迫ってくる。って、わざとやってるな、これ！

「こら！もう、誰の影響受けてんのよ！」

「そうね　舞の影響、かしら？」

え〜っつ!?

「なに教えてんのよ、舞ってばっ！」

「わたしが、どうかしたのかしらあ？」

声が聞こえたのと同時に、あたしの両肩が、がっちり掴まれた。

「話せばわかる！」

「問答無用！ えいっ！！」

背中と両方のほっぺたに、妙に柔らかいものが

つて、これ！？」

「うわあ〜あっ！ 乗せるんじゃないっ！！」

「あらー、咲が望んだんでしょ、この胸。ほらほら、しつかり味わいなさいよっ」

うわわわっ。肩は重いし、ほっぺたはむにゃむにゃするし、ったく、このーっ！

「いーかげんにしないと、つぶすよっ！」

切れかけたあたしが思わず言ったとたん、むにゃむにゃの動きがびたつと止まった。

「つぶして小さくなるなら、それでもいいわよ？」

あ

「ご、ごめん ごめんね、舞」

ぐりぐりぐり

耳からじゃなくて、頭の上から音が響いてきた。

「そ・れ・が、わかつてるなら、ちゃんと最初からいいなさい、よっ！」

「あ、あごーあごで頭を擦らないでっ！」

もう、頭のとっぺんは痛いし、両方からむにゃむにゃが来るし、勘弁 あれ？ むにゃむにゃが、むにゃになつてる！

「あ、ああ、あああ！ 縮んだ、縮んだよ。舞のおっぱい！！

そうそう、やっぱりこれだよ。このぺらっぺらな感じ。これでこそ舞の

あたしは背中に振り返って、そのまま胸にしがみついた。これこれ。ああ、いつもの感触だあ。

「さあキきちゃああ〜あん？」

背中がぞくつ、となつた。この声は、この状況は、すっごくヤバイよ！

「え、あ、と な、なんででしょうか？」

あたしの背中に、舞の両手が回ってきた。いつもだったら嬉しいんだけど これ、逃さないってことお！？」

うっ、振りほどくのは簡単だけど、簡単じゃない

よお！

「ごめんなさい。舞はずっと、ここで胸を張っていたでしょう？ だからきつと、胸の大きさを気にして、おおぞらの樹に——フィリア女王にお願しているのじゃないかと思ったのよ。勘違いだったみたいね」

満がそう言ったとたん、あたしの背中を抱えてた手の感じがなくなった。

「まえからね、おおぞらの樹をどうやって描こうか迷ってて 下から見上げる構図はどうかなあ、って思ったのよ」

ああ、そっか。樹を下から見上げたら、そりゃ胸張るわ。

「そうね、それなら許してあげる。勘違いさせちゃったのはわたしだし。ただし さっき言ってたことは、聞こえちゃったから」

へっ？ さっきって、なんのこと？

「満さんと薫さんの誕生日は、きょう！ ついでに

やりそこなった咲の誕生日の分までお祝いしてあげるわ！ ムーブっ!!」

げげっ!!

座ってた長いすから、あたしはとっさに跳ね飛んだ。いすの向こうの舞が、両手に精霊抱えてる!?

「わーっ！ あ、あたしはむね足りてるからっ！」

両むねを手で隠して目をつむったけど、

「私もこれでいい でも満は増やした方がいいんじゃない？」

「薫 あとで話し合う必要があるそうね」

あれ？

なにも起きない っていうか、ふふふって、舞

の笑い声？

「びっくりした？ それならおあいこね」

目を開けてみたら、満の背中からムーブが顔出してるのが見えた。

「舞っ！ ちょっと攻撃的すぎっっ！」

「咲と1年以上もつきあってれば、自然とこうなる

わ。必要なら、ねっ!」

手に持ってた白いボールをあたしに投げつけながら、舞が言った。

ギリギリ顔の手前で受け止めたけど　なんで満と薫もうなずいてんのよ、まったく、もっつ!

「胸は、張るだけにしましょ。ね♡」

あたしのそばまで来た舞が、おおぞらの樹に向かって、胸張って言った。

「ん、そっだねえ。ん!」

舞の胸が、また妙に大きい　って、ちがうわ。

服の脇から手を入れて、膨らませてるんじゃないの。

「胸を張るって、そうじゃないでしょーがっ!!」

—おしまい—